

「みんなで布チョッキン」 手づくり遊具が都市貧困層の子どもたちへ届く

2008年3月

認定NPO法人 幼い難民を考える会
事務局長 峯村里香
福田晃子

TEL: 03-3796-6377
E-mail: info@cyr.or.jp





カンボジアへ到着



CYRプノンペン事務所に到着



縫製者の声

アン・テア・ヨットさん（22歳）

夫と子ども2人の4人家族です。夫はバイクタクシーをし、私は養豚で収入を得ています。4歳の娘は、心臓病のため、フランスのNGOの支援を得て手術を2回受けました。

縫製は、午後の時間を使って行っています。労賃は、日々の生活の助けになっています。保育料も払えるようになりました。



スエノ・チョムさん（28歳）



2003年に結婚しましたが、夫は別の女性と住んでいます。今は夫の両親、娘2人と一緒に5人で暮らしています。夫の両親は優しいし、私が出て行くと一緒に住む人が誰もいなくなるので。

縫製の報酬で、娘の保育料を払っています。その他、毎日の食事代などにも使えるので、とても助かっています。

貧しいし、仕事がないので困っています。子どもにはずっと勉強させたいですね。



パルさん（43歳）

結婚してプノンペンからバンキアン地区に移ってきました。

10人家族、夫は日雇いの建設労働者です。毎日仕事があるとは限りません。私は、家の前で小商いをしたりバナナを売ったりして、1日2.5ドルくらいの収入があります。

縫製の仕事は、時間の空いたときにできる仕事なので、やりやすいし娘たちも手伝ってくれています。収入は、日々の食費にもあてられるのでありがたいです。

今、中学校に通っている16歳の娘は、お金がないので辞めさせようと思っています。学校に通うための自転車と毎日必要な1000R（約25円）が払えないから・・・。



配布先1

カンダール州の公立幼稚園で、先生たちへ研修をした後、配布

step1

縫製後、箱詰めして研修会場へ運びました。



Step2

先生たちに人形・ボールの使い方、目的をレクチャしました。



step3

先生も楽しみながら遊び方を練習しました。



step4

幼稚園で子どもたちがいつでも使えるようにクラスに準備されています。



step5

子どもたちの遊びに活用されています。





配布先2 都市貧困層の家庭訪問調査で、 訪問のお礼として子どもたちに布ボールを配布

カンボジアの首都プノンペンでは、

地方から現金収入を求めて都市に移住する人が増え、現在700ヶ所のスラムがあると言われています。毎年2万人が流入し続けていて、売春・エイズ・麻薬などの問題とともに貧富の差が急速に拡大しています。



貧困層の住居



幼い難民を考える会(CYR)は、

都市スラムに住む子どもたちが、健全に成長できるよう新たな支援を開始するために、約200軒の家庭を訪問し生活状況の調査を実施しました。



家庭調査の様子
左・右はCYRスタッフ、クンティア・山極

【調査質問の一例】

- ・家族構成は？
- ・1日お米はどのくらい使いますか？
- ・飲料水・洗濯水はどうしていますか？
- ・トイレはありますか？
- ・収入は？
- ・今、困っていることは？



写真



上: 大事そうにボールを抱える子どもたち

下: おかあさんたちも嬉しそう

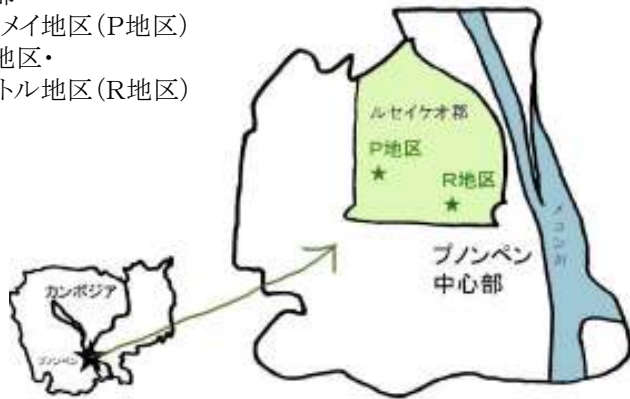
遊具に触れることの少ない子どもたちの
もとで、長年大切に使われていきます。
ありがとうございました。



ご参考1: 家庭調査の結果

調査地区

ルセイケオ郡
プノンペントメイ地区(P地区)
ルセイケオ地区・
第6キロメートル地区(R地区)



土地 - 追い出される不安

所有していないため、現在住んでいるところからいつ追い出されるか分からないという不安を常に抱えている。

家 - 掘っ立て小屋のよう

ニッパ椰子やトタンでできた簡素な建物が多い。狭く暗い一間に大人数で生活している。

食事 - 満足に食べていない

1日2～3回とっていると言うが、日々の収入に左右されるため、食事を抜くこともしばしば。十分な栄養が摂取できていない。

トイレ - 不衛生

半数近くの家族が持っていない。あっても外に小さなレンガを敷いているだけで、用を足した後は匂っている場所もある。

仕事 - 日雇い労働で日銭を稼ぐ

日雇い労働に従事する人が大半。特にバイクタクシー、建設現場での労働、野菜・魚・お菓子・カンボジア式うどん・貝などを販売する小商いが多い。縫製工場に勤めに出て家族を支えている若い女性も20%程度いた。

飲み水 - 不衛生

水を購入したり、雨期には雨水を利用する家族が多く、衛生的な水を確保する事がむずかしい。

収入 - 食べていくので精一杯

日雇い労働は毎日仕事があるわけではなく不安定。その日の食費を稼ぐのが精一杯で、いったん病気になるれば、借金をしなければならず、ますます貧しくなるという非常に厳しい現状。

精神状態 - あきらめ

将来への希望を持つことができなかつたり、栄養不足のために顔色が優れず表情が暗い人が多い印象であった。インタビューでは、この先どうしていいのかわからずに泣き出してしまう女性もいた。



ご参考2: 食と教育の支援開始

P地区

学校までの距離が遠い、貧しいなどの理由で通えないことが多かった。CYRは2005年に小学校の建設に協力。

- ・プノンペン中心部のスラムから強制的に移住させられた人々が住む。
- ・市街地から遠く離れているため、仕事を探すのが容易ではない。
- ・仕事のない日は十分に食事がとれないなど、子どもの栄養が不足している。
- ・6年生までの教室が不足。子どもの数は今後も増えると予想される。

R地区

CYRは、2003年から現地NGO「ケマラ」が運営する保育所へ協力してきた

- ・内戦時代前から住んでいる人が多い
- ・比較的街の中心部に近いため、様々な種類の仕事が見られる。
- ・両親が仕事に出ている間、子どもを預けられる場所がなく困っている

支援事業には現地パートナーの存在が欠かせない。特に貧困地域では地元の人々の参加、行政の理解がとても重要。

学校建設

新校舎を建設し、合計350人の子どもたちに教育の機会を提供する。



朝食の支給

子どもたちの基本的な栄養と健全な成長を支えるため、幼稚園・小学校に通う子どもと地域の子供を対象に朝食を支給する。地域の人々が、仕事として交代で給食の準備にあたり、収入の一助とする。

※2007年8月、給食支援を開始



©小林正典

保育所を開設

現地NGO「ケマラ」が新たに2ヶ所の保育所を開所し運営していけるよう、周囲の環境に適した施設設備、教材、保育研修などを支援する。保育所では昼食を支給。



03年からケマラが運営している保育所
©小林正典



保育所開設